

驚いてはなりません

ヨハネの福音書 5章 19-30節

はじめに

今日の聖書箇所には、イエス様とはどのような方なのか、イエス様と神様はどんな関係にあるのかが書かれています。5：18には、イエス様は「**神をご自分の父と呼び、ご自分を神と等しくされた**」と書かれています。イエス様は、神様を父と呼ばれる方です。それゆえ「神の子」と言えます。またイエス様は、神様と等しい方です。イエス様は、神様と等しい方ですから、神様そのものです。イエス様は、神の子であり、神様そのものである方です。これらのことを詳しく説明しているのが今日の聖書箇所と言えます。

1. 神とイエスの関係

19-20節で、イエス様はこう言われます。「**まことに、まことに、あなたがたに言います。子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分から何も行うことはできません。すべて父がなさることを、子も同様に行うのです。それは、父が子を愛し、ご自分がすることをすべて、子にお示しになるからです**」。イエス様は、神様と「等しい方」です。ですから神様そのものです。しかし神様とイエス様には秩序があります。イエス様は神様を父と呼び、神様はイエス様を子と呼びます。イエス様は、「自分から何も行うことはできません」と言っておられます。このことは、30節でも繰り返し言っておられます。イエス様は、24節や30節にあるように、神様からこの地上に「**遣わされた**」方です。ですからイエス様は、この地上で「自分の意志で」自由にされる方ではありません。あくまでも、「父がしておられることを見て行う」「すべて父がなさることを、同様に行う」「ただ聞いたとおりに」「みこころを求める」のです。つまり神様とイエス様は、常に一致しているのです。神様のみこころを、この地上でイエス様が成し遂げるのです。イエス様は、神様のみこころ以外のことはなさりません。イエス様はすでに、4：34で、「**わたしの食べ物とは、わたしを遣わされた方のみこころを行い、そのわざを成し遂げることです**」と言われていました。20節にあるように、イエス様と神様は、深い愛で結ばれています。

それゆえ私たちは、イエス様を見れば、神様が分かるのです。1：18に、「**いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである**」とありました。神様は目に見えない方です。しかし二千年前に、神の子であり、神と等しい方であるイエス様をこの地上に遣わされました。そしてイエス様は、神様のみこころを行い、神様がどういう方であるのかを具体的に、目に見えるかたちで人々に示されたのです。

私たちは、イエス様を通して神様を知ることができるのです。23節に、「**すべての人が、**

父を敬うのと同じように、子を敬うようになるためです。子を敬わない者は、子を遣わされた父も敬いません」とあります。神様は私たちに、イエス様を敬うようになってほしいと願っておられるのです。神様は、イエス様を通してご自身を現わし、イエス様を通してご自身を知ってほしいと願っておられるのです。ユダヤ教もイスラム教も、旧約聖書を信じ、神様を信じています。しかしイエス様を信じていません。イエス様を神の子であり、神と等しい方と信じていません。イエス様によれば、イエス様を敬わなければ、本当の意味で神様を敬うことはできないのです。イエス様を信じなければ、本当の意味で神様を信じていることにはならないのです。なぜなら神様は、イエス様を通して、ご自身を現わしておられるからです。

イエス様は言われました。「**わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。私を通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません**」(ヨハネ 14:6)。私たちは、イエス様を通してしか、真の神様を知ることはできないのです。イエス様を通してだけ、この天地を造られた真の神様と出会うことができるのです。

古代から日本人は、先祖や偉人、自然などを神としてきました。日本人は、神様そのものではなく、神様が造られた人間や自然を神として拜んできました。そしてそれらが自分たちを見守ってくれる存在として大切にしてきました。私たち日本人は、神ではないモノを神として拜んできたのです。真の神様と出会う道は、イエス様にしかありません。イエス様を通してしか誰も、真の神様と出会うことも、知ることもできないのです。

2. いのちを与えるイエス

イエス様は、三十八年も病気にかかっている人を癒されました。それは、神様のみこころだったからです。神様は病気を癒すことのできる方です。そのことを示すために、イエス様は彼を癒されたのです。しかし 20 節には、「**これよりも大きなわざを子にお示しになるので、あなたがたは驚くことになります**」とあります。三十八年も病気にかかっている人を癒されるという出来事よりも、もっと驚くべき大きなわざが、イエス様によってなされると言うのです。

その一つは、21 節にあります。「**父が死人をよみがえらせ、いのちを与えられるように、子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます**」。神様は、死人をよみがえらせます。十字架で死なれたイエス様を三日目によみがえらせました。それと同じように、イエス様も死人をよみがえらせ、人々にいのちを与えられるのです。

そのことがもう少し詳しく 24-26 節に書かれています。「**まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わされた方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきにあうことがなく、死からいのちに移っています。まことに、まことに、あなたがたに言います。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。それを聞く者は生きます。それは、父がご自分のうちにいのちを持っておられるように、子にも、自分のうちにいのちを持つようにしてくださったのです**」。

ここに、「死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です」とあります。今の時代が、死人がイエス様の声を聞く時なのです。聖書で言う「死」には、二種類あります。一つ

は「肉体的な死」で、もう一つは「霊的な死」です。「肉体的な死」は、医学的な死、つまり心臓が止まる時の死と言えます。では、「霊的な死」とは何でしょうか。それは、神様から離れた状態、神様に背を向けた状態と言えると思います。

イエス様が語られた有名なたとえ話に、「放蕩息子」というものがあります。ある息子が父の財産の分け前をもらって、遠い国に旅立って行きます。しかし彼は、そこで放蕩して、財産を湯水のように使ってしまう、食べることにも困ってしまいます。そこで彼は、我に返って父のもとに帰るのです。息子が帰って来た父は、こう言います。「この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった」(ルカ 15:24、32)。この父は、息子が遠い国にいた時は、死んでいたと言っています。つまり父から離れている息子は、死んでいたと言うのです。実際には生きていたのです。しかし父は、息子は死んでいた、生き返ったと言うのです。このたとえ話の父とは、神様のことです。このたとえ話が教えていることの一つは、神様から遠く離れている人は、「死んでいる」ということです。この天地を造られた神様から離れ、背を向けて生きている人は、たとえ肉体的に生きていても、「死んでいる」のです。つまり本当の意味で、生きていないのです。これが「霊的な死」というものです。

イエス様は、今の時代の霊的な死人たちにいのちを与え、よみがえらせる方です。本当の意味で、私たちを生きる者としてくださる方です。では、イエス様はどうやって、霊的に死んでいる人たちにいのちを与え、よみがえらせるのでしょうか。それは、ご自身の「ことば」「声」によってです。24 節に、「わたしのことばを聞いて、わたしを遣わされた方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきにあうことがなく、死からいのちに移っています」とあります。また 25 節に、「死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。それを聞く者は生きます」とあります。イエス様のことばを聞いて、神様を信じる人は、「永遠のいのち」を与えられるのです。つまり神様のもとに帰り、神様と和解し、神様と共に生きるのです。この天地を造られた神様と共に生きること、それこそ本当の意味で「生きる」ということであり、「いのち」なのです。

イエス様のことばを聞いて、神様を信じる時、その瞬間から「死からいのちに移る」のです。「永遠のいのち」に生き始めるのです。この「いのち」は、その瞬間から始まり、永遠に続くのです。たとえ肉体的な死を迎えても、その「いのち」は決して消えることはありません。つまり私たちは、たとえ肉体的な死を迎えても、神様から決して離れることはないのです。死後の世界でも、神様と共に「生きる」ことができるのです。これが「永遠のいのち」です。イエス様は、こう言われました。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。あなたは、このことを信じますか」(ヨハネ 11:25-26)。イエス様のことばを聞いて、神様を信じる人は、「死んでも生きる」のです。たとえ肉体的な死を迎えても、神様から離れず「いのち」を持っているのです。永遠に神様と共にいることができます。その意味で、イエス様のことばを聞いて、神様を信じる人は、その瞬間から永遠に死ぬことがないのです。永遠に、決して神様から引き離されることはないのです。なぜなら、その瞬間から、「死か

らいのちに移っているから」です。

イエス様は、26 節にあるように、いのちを持っている方です。私たちがもし「永遠のいのち」がほしい、「死んでも生きる」いのち、「決して死なない」いのちがほしいと願うなら、イエス様のことばを聞いて、神様を信じなければなりません。Ⅰヨハネ 5：11-12 には、こうあります。「**その証しとは、神が私たちに永遠のいのちを与えてくださったということ、そして、そのいのちが御子のうちにあるということです。御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません**」。現代では何と多くの人が、生きていても死んでいるのでしょうか。生きていても「いのちを持っていない」、本当の意味で生きていない人が何と多くいるのでしょうか。イエス様には、「いのち」があるのです。イエス様のことばを聞いて、神様を信じれば、その瞬間から永遠に「死からいのちに移る」ことができるのです。実に簡単なことです。決して難しいことではありません。時間のかかることでもありません。今、この場で、「死からいのちに移り」、永遠に続く新しい人生を生きることができるのです。

3. さばきを行うイエス

三十八年も病気にかかっている人を癒される出来事よりも、もっと驚くべき大きなわざの一つは、いのちを与えることでした。もう一つは、22 節にあります。「**父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子に委ねられました**」。神様は、誰をもさばきません。すべてのさばきは、イエス様に委ねられているのです。そのことがもう少し詳しく、27-29 節に書かれています。「**父は、さばきを行う権威を子に与えてくださいました。子は人の子だからです。このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞く時が来るのです。そのとき、善を行った者はよみがえっていのちを受け、悪を行った者はよみがえってさばきを受けるために出て来ます**」。

先ほど、聖書で言う「死」には、二種類あると言いました。一つは「肉体的な死」で、もう一つは「霊的な死」です。イエス様は、霊的に死んでいる人をよみがえらせ、「いのち」を与えられます。しかしそれだけでなくイエス様は、肉体的に死んでいる人をもよみがえらせ、「さばき」を与えられるのです。これが「最後の審判」と呼ばれるものです。

墓の中にいるすべての人、つまり肉体的に死んでいる人は、イエス様の声を聞いてよみがえる時がやがて来るのです。これは、イエス様がこの地上に再び来られる、世の終わりの時です。この時に、すべての人が墓の中からよみがえるのです。善を行った者も、悪を行った者もすべての人が、イエス様のことばによってよみがえらされるのです。そして「善を行った者」は、「いのち」を受け、「悪を行った者」は、「さばき」を受けるのです。

では、「善を行った者」とは誰でしょうか。また「悪を行った者」とは誰でしょうか。私たちは、イエス様のことばを聞いて、神様を信じて、善いことばかりを行うわけではありません。悪を行うこともあるのです。しかし私たちは、24 節のイエス様のことばを思い出すなければなりません。「わたしのことばを聞いて、わたしを遣わされた方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきにあうことがなく、死からいのちに移っています」。イエス様

のことばを聞いて、神様を信じる人は、「さばきにあうこと」がないとはっきり言われています。そして、イエス様のことばを聞いて、神様を信じる人は「永遠のいのち」を持つ、「死からいのちに移っている」と言われています。ですから、最後の審判の時、イエス様にさばかれるのは、イエス様のことばを聞かず、神様を信じない人と言えます。イエス様のことばを聞いて、神様を信じる人は、決してさばかれることはないのです。すでに「死からいのちに移っているから」です。

おわりに

イエス様のさばきの基準は、イエス様のことばを聞いて、神様を信じたかどうかなのです。霊的に死んでいるか、それとも「永遠のいのち」を持っているかどうかなのです。イエス様のことばを聞いて、神様を信じるというのは、私たちの人生に新しい「いのち」を与えます。天地を造られた神様と共に生きるという本当の意味で「生きる」、「いのち」を与えます。またイエス様のことばを聞いて、神様を信じるというのは、肉体的な死の後にも意味を持つものです。永遠の問題に意味を持つものです。イエス様にさばかれて、永遠に神様から離れて生きるかどうかの問題なのです。

私たちは今、いつでもイエス様のことばを聞くことができます。イエス様は、こう言われます。「死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。それを聞く者は生きています」。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたが遣わされたイエス様は、あなたと愛で結ばれ、あなたの御心を地上で成し遂げる方です。私たちは、イエス様を通してあなたと出会い、あなたを知ることができます。

イエス様を通してあなたを信じる時、私たちは「永遠のいのち」を与えられます。そして決してさばかれることはありません。どうか、イエス様のことばを聞ける今この時、多くの人が神様を信じ、「いのち」を得ることができますように。この世の人生を、本当の意味で生き、「死んでも生きる」永遠のいのちに生かされますように。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。